

第4章

女の子たちが体験する 7つの苦しみ



女の子の過酷な人生

親元を離れて住み込みで働くだけでも、幼い女の子にはつらい経験です。しかし、女の子が家事使用人として働くことの問題が、これまでバン格拉デシュで議論されることはほとんどありませんでした。

転機が訪れたのは、2013年9月、アドリちゃん（11歳）が雇い主から虐待を受け、ダッカ市内のゴミ捨て場から瀕死の状態で見つかった事件が発端でした。発見されたアドリちゃんは、体中から出血しており、アイロンで押しつけられたようなやけどがありました。この事件をきっかけにバン格拉デシュでは家事使用人が置かれている労働環境や、女の子を働かせることが問題視されるようになりました。

家事使用人として働く子どもたちが抱えている苦しみには、いったいどのようなものがあるでしょうか。



●虐待を受けゴミ捨て場で見つかったアドリちゃん



その① 低い賃金

家事使用人として働く子どもの賃金は、おとなに比べて半分から3分の1ぐらいが一般的です。住み込みの場合、食事と寝る場所が提供されることと引き換えに、まったく賃金を支払われずに働いている子どもも少なくありません。ILO^{*}の調査では、52%の子どもが賃金をもらっていない^{*}、という結果が出ています。貧しい家の子どもを養ってあげているのだから「お小遣いをあげる程度でよい」という考えが常識になっているのです。

女の子の働き先は、同じ村出身の裕福な家庭が多いです。紹介業者の斡旋^{あつせん}で仕事をみつける場合が多く、業者自身と同じ村出身である場合もあります。賃金は年齢にもよりますが、月200タカ（約280円）から高くても1000タカ（約1400円）程度^{*}で、食器を割ったり、服を破いたりすると給料から引かれてしまうケースもあります。

バングラデシュでは、卵が大体1個8タカ、ジャガイモ1キロ20タカ、鶏肉は1キロ120タカ、お米を買うと15キロ300タカ、といった具合です。家

* ILO（国際労働機関）：世界各国の労働・生活条件をよくするために活動する国際機関。各国の目標となる労働基準を設定し、政府がこれらの取り組みを効果的に実施できるように技術協力や、研修、教育、調査研究をおこなう。

* 参考文献 Baseline Survey on Child Domestic Labour in Bangladesh (ILO, 2006)

* バングラデシュの主要産業である縫製業での最低賃金は月5300タカ（約7500円）程度であることを考えると、使用人として働く女の子の賃金が格段に安いことがわかる。

事使用人の女の子の賃金がどれほど少ないかがわかります。

賃金は、全額を自分で受け取っているケースもありますが、一部だけを受け取るケースや、直接親に支払われるため、自分の給料の額を知らない女の子もいます。さらに、食事や寝る場所が提供されることや、将来の結婚資金を雇い主が出すという口約束と引き換えに、月々の賃金がまったく支払われていないケースも報告されています。

その② 1日16時間の長時間労働

家事使用人の労働時間は長く、とくに住み込みで働いている場合、朝は雇い主の家族よりも早く起きて朝食の用意、家族の外出の支度、掃除、夕食後の片づけ、と1日中働き通しです。バングラデシユの夕食は遅く、10時頃までつづくこともあり、片づけが終わるのが深夜になるのが一般的です。

朝6時には起床して、朝食もとらずに仕事をはじめ、真夜中まで働き、雇い主の家族が休んでから、最後に寝ます。NGOの調査によると家事使用人の平均労働時間は、1日約11時間でした。年齢があがるほど労働時間は長くなり、



● だれよりも早く起きて朝食の支度をする



15歳以上の子どもでは1日16時間以上働いているケースもあります（14ページ図参照）。これでは自分の時間や、寝る時間を十分にとることさえできません。

ロクサナちゃん（11歳）は、小学校4年生までは学校に通っていましたが、いまは家事使用人をしています。ロクサナちゃんが働いている家では、おとなの家事使用人もいますが、だからといって仕事が減るわけではありません。働き出してから、ロクサナちゃんは学校に行くのをやめざるを得ませんでした。いまは、雇い主の幼い子どもを学校に送り届けることが彼女の役目です。ロクサナちゃんは家事も子守もやっているので、早朝から深夜まで働き詰めです。夜ご飯を食べるのが遅くなるうえ、睡眠時間も短くなります。

家事使用人が寝ている場所も悲惨で、33%がキッチンの隅で寝ていました。リビングで寝ている子が20%、雇い主の子ども部屋で寝ている子が20%、驚くべきことに外のベランダで寝ている子が17%でした。これではいくら休んでも十分に体力を回復させることはできません。キッチンで寝ていると、夜、雇い主の男性家族が出入りすることもあります。プライバシーが確保されないだけでなく、女の子の身の安全が保障されていません。

ちなみに、男の子の家事使用人の場合、女の子に比べて、一般的に就寝時間

■家事使用人が寝ている場所

寝る場所	割合
キッチン	33%
ベッドルームの床	20%
リビング	20%
ベランダ	17%
個室	7%
物置	3%

*現地 NGO フルキの調査による

が早く、自由時間も多いという調査結果があります。女の子やおとなの女性が家事使用人として同じ家で働いている場合、夕食の片づけなどは女性の仕事になることが多く、男の子は先に寝ることができません。食事づくりは女性の仕事であるといった社会通念が、女の子たちの労働を重くしています。

また、男の子は荷物運びとして雇い主と一緒に市場に出る機会も多く、移動時間などは家事から解放されるため、女の子に比べると実際の労働時間が短い傾向にあります。

その③ きつい労働の連続

1年のうちもっとも忙しい時期は、イスラム教の断食月（ラマダン）^{*}やイード^{*}の時期です。断食月は日没後と夜明け前に特別な食事を食べます。日没後に食べる食事はイフタルといい、フルーツやナツメヤシなどの胃にやさしいものを食べます。そのあとに普段よりも豪華な夕食として、揚げものや甘いものを家族みんなで囲みます。

さらに、夜中の2〜3時頃に起きて、セヘリと呼ばれる夜明け前のご飯を食



●イードの豪華な食事

*イード：12ページ参照。

*断食月（ラマダン）：イスラム教では、イスラム暦9月のラマダン月の30日間、日の出から日没まで食べることを、飲むことを禁止している。断食はイスラム教の信仰にとって、最も重要な活動の1つ。ラマダンのときは、仕事も学校も早めに切りあげ、家族とともに日没後の食事や、夜明け前の食事を楽しむ。



べます。ラマダン中は日没までなにも食べることができないので、夜にたくさんのご飯を食べて日中に備えるのです。このように日没から夜明けまでの間に3食用意しなければならぬため、家事使用人の仕事も増えるのです。

イードは年に2回ありますが、犠牲祭であるコルバニー・イード^{*}の時期には、牛やヤギを神への捧げものとして潰し^ぶ、その肉を近所の人や貧しい人に配る習慣があります。この「肉を切りわけて配る」という作業を手伝わされるのも、女の子たちにとっては大変な重労働です。また、祭りの期間中は訪問客も多くなり、料理や片づけの仕事も増えます。

女の子たちに、「毎日の仕事で一番つらい作業はなに？」と聞くと、「洗濯」と多くが答えました。バングラデシユの女性の民族衣装のサリー^{*}やサルワール・カミーズ^{*}は、布が多く使われており、洗濯、すぎ、しぼりは重労働です。都市部でも洗濯機がない家は多く、たくさんさんの洗濯物を手で洗うのは大変です。また、電力事情が悪く、頻繁に停電が起こることも家事労働を大変にしています。そのほかには、「朝早く起きること」「魚を切ること」「高齢者の介護」などの答えがありました。

川がたくさんあるバングラデシユでは川魚が豊富で、スパイスで味つけた



^{*}コルバニー・イード：犠牲祭。牛やヤギを神様に捧げる祭り。家族や親族で牛を買い、さばき、貧しい人にわけ与え、家族で食事を楽しむ。朝の早い時間から解体をはじめ、昼過ぎには親族などへのあいさつ回りに行く。

り、カレーの具材にしたりしてよく食卓に並びます。日本のように切り身にしてパックで売っているわけではなく、一匹魚をまるごと買ってきて、切りわけのです。大きな魚を家でさばくのは、10代の女の子にとっては重労働です。また、雇い主の家族に高齢者や病人がいると、介護の仕事もしなければならず、休みなく働くのはとても大変です。

その④ 不十分な食事と体調管理

ほとんどの女の子が不満に思っているのが食事です。たいていの雇い主の家では、自分たちが食べる上質の米と家事使用人のための安い米をわけています。それだけでなく、冷蔵庫に何日も保管してあった食べ残しをそれがダメになりそうなときに家事使用人に食べさせることがあります。

「新しいものを食べさせてもらえない。古くなったものばかり」という不満は多くの女の子に共通しています。もちろん、家族同様にきちんとした食事を用意する家もありますが少数派です。朝昼晩の食事が保障されていたとしても、十分な栄養がとれているとは限らないのです。

*サリー…長さ5〜6メートル、幅約1メートルの1枚布でできた南アジア地域の女性が着用する民族衣装。細長い布の意味。バングラデシュでは、日常着にしているのは年配の人が多く、若い人たちは結婚式やパーティーのときに身につける。



*サルワール・カミーズ…南アジアの民族衣装。カミーズと呼ばれるシャツと、サルワールと呼ばれるズボンの上下セットを指し、女性はストールを含めた3点セットで着る。バングラデシュの女性は普段着として着ている。





健康について尋ねると、多くの女の子が体調の悪いときに休ませてもらえず、薬をもらって仕事をつづけ、横になることも許されないといいいます。体調の変化の大きい思春期の女の子にとっては、とてもつらいことです。

その⑤ 学校に行けない子どもたち

家事使用人の女の子のほとんどは、学校に通っていません。現地のNGOが実施した調査では、だれ一人として学校に通えていませんでした。

小学校1年生までしか学校に行っていなかった女の子や、17歳でも字がまったく読めない女の子、自分の名前しか書けない女の子がいました。毎月給料を受け取ったときにサインをするのですが、なにが書いてあるのかわからない女の子も多くいます。

家事労働で疲れ切った女の子が、勉強する意欲を持ちつづけることは大変なことです。雇い主も学校に通ったり勉強したりするぐらいなら、働いてもらったほうがよいと考え、女の子に学ぶ機会を与えることはほとんどありません。

でも、女の子の側からすると、文字が読めない、書けない、計算ができない



●スラムの路地裏では、昼間でも学校に行っていない子どもの姿が見られる

となると、将来の仕事の選択肢が狭くなります。バングラデシュで女性の就職先として注目されている縫製工場に勤め、ミシンで衣服を縫う仕事をするにも、ある程度の読み書きの能力が必要となります。店の販売員になったり、自分で商売をはじめるとしても、学力が必要です。教育を受けられない女の子は、社会で生きる道が限られてしまいます。

その⑥ 雇い主の暴力

女の子たちが、雇い主やその家族から大声でののしられたり、たたかれたり、耳をひっぱられたり、ひどいときには、熱した金属スプーンを腕に押しつけられるといった拷問にちかいかい暴力を受けているケースが報告されています。

2006年に、ダッカの高級住宅地の裕福な家庭で働いていた10歳の家事使用人の女の子が、女性の雇い主からさまざまな拷問を受けた末、マンシヨンの6階から突き落とされるといふ事件が起きました。女の子は両足を複雑骨折したものの一命を取り留めましたが、同じ家で働いていた15歳の女の子は突き落とされて死んでしまいました。

*バングラデシュの識字率は男性約75%、女性約70% (UNESCO Institute for Statistics, 2016)。15〜24歳の若者に限って言えば男性91%、女性94% (世界子供白書2017) となっており、国全体としては改善傾向にある。



2009年7月には、南部のコックスバザールで、13歳の女の子が雇い主から10タカ（約14円）を盗んで、そのお金でジュースを買ったことが雇い主にみづかり、体罰を受けました。その結果、意識不明の重体となり、亡くなるという事件がありました。このようなひどい暴力事件を起こす人も、ある程度の社会的地位がある人やその家族であることが多く、家族にとつてはやさしいお父さん、お母さん、お兄さんなのです。

バングラデシュの新聞に取り上げられた、子どもの家事使用人に対する暴力事件の件数が、ここ数年で急増しています。2016年に雇い主による暴力が原因で死亡した家事使用人は、報道されているだけで40人のぼりです。死亡した40人のうち18歳以下は28人です。自殺も5件報道されており、18歳以下は4人となっています。

雇い主が隠して表沙汰にならないケースが多いことを考えると、新聞に載った事件は氷山の一角です。一般的に家という閉鎖された場所で起こる事件はわかりにくい傾向があります。日本でも家庭内暴力（DV）は、身内の問題として通報されないか、警察沙汰になっただとしても新聞が取り上げるのはよほど深刻、もしくは特別なケースだけです。

■新聞に取り上げられた家事使用人に対する暴力事件（2016年）

暴力の種類	年 齢							総計	訴訟 件数
	6歳 以下	7～ 12歳	13～ 18歳	19～ 24歳	25～ 30歳	30歳 以上	年齢 不詳		
身体的暴力	1	8	2		1	2	7	21	12
性的暴行／性的暴行未遂			1				1	2	2
死亡（身体的暴力を含まない）		1	17		4		5	27	11
性的暴行後の殺害			1					1	1
身体的暴行後の死亡		4	1			1	1	7	6
自殺			4	1				5	
自殺未遂			1					1	
総 計	1	13	27	1	5	3	14	64	32

*出典：バングラデシュ NGO 「Odhikar」

53ページの表からわかるように訴訟が起きた件数は、全事件の半数しかありません。家庭という密室でおこなわれる家事使用人への暴力を立証することのむずかしさや、訴訟を起こしてしまつたらつぎの仕事がなくなるといった不安から、圧倒的に不利な立場に置かれている家事使用人の女の子の実情が想像できません。

ちなみに、日本でも児童相談所に寄せられる児童虐待の件数*が増えつづけ、年間12万2000件を超えています。児童労働が一般的ではない日本でも、児童虐待が驚くほどの数にのぼることを考えれば、一段と低い社会階層にあるとみられているバングラデシユの家事使用人の女の子が、おとなのストレスのほけ口になることは想像に難くありません。

その⑦ 性的虐待

女の子の場合、雇い主やその家族から性的な虐待を受ける危険性があり、レイプ犯罪の報道もあとを絶ちません。被害に遭つてもおとなに脅され、泣き寝入りするケースや、どこに訴えてよいのかわからない女の子も多く、性的虐待

* 参考文献
2016年度速報値・厚生労働省発表。

事件の実態ははっきりとしたことがわかりません。とくに若い女の子は、学校に行っていないこともあり、相談できるようなおとなが身近にいません。友だちと話す機会もなく、親とも離れて暮らしているので、自分を守る知識や社会に訴えるすべがないのです。

また、両親も、娘が仕事先でたたかれることは「家でもしかるときはたたくのだから当たり前」と考え、他人の家で苦勞することについても「結婚すれば舅・姑しゅうとじょうとめに仕えて苦勞するのだからその練習」といった認識しかないことも問題です。

さらに、性的虐待の問題をみえにくくする原因は、被害に遭った女の子がそのことを話したがないことにもあります。支援するNGOのスタッフが話を聞こうとしたとき、表情が急に硬くなることはあっても、決してながあつたかは口にしません。女の子たちのグループと話をしても、雇い主の家での振る舞いの話になると、「仕事があるから」とすつと席を立ってしまったり、よいことばかりを話して問題はないことを強調したりします。

性的虐待は女の子にとってとてもいやな、怖い体験として、心の傷になります。自分が被害を受けたことを人に知られるのもつらいことです。また、自分

■報道された子どもの家事使用人に対する暴力事件

	2014	2015	2016
暴力	9	20	22
レイプ	3	11	6
殺人	7	9	8
自殺もしくは理由不明の死亡	0	13	13
合計	19	53	49

* 出典：バングラデシュ NGO 「Odhikar」

が被害に遭ったことがわかると、雇われ先を追い出されたり、よくないウワサが流れて結婚できなくなってしまうことから、女の子も口を閉ざしがちになります。ベグンさん（17ページ参照）のように、村中から白い目で見られることも珍しくありません。

女の子のストリートチルドレン*の中には、雇い主の家で暴力を振るわれ、路上に飛び出してしまった子も多くいます。路上での生活は一段と悲惨です。そのため、女の子は雇い主にどのような扱いを受けようともその境遇を甘んじて受け入れ、なんとか生き延びようがまんを重ねています。



*ストリートチルドレン…急速な都市化や急激な人口増加により、家族に養われることが困難となり、おもに都市の路上で生活している子どもたち。1人で生活している場合や、家族と路上で生活している場合などさまざまである。性的・経済的な搾取を受けることが多く、不衛生な環境のせいで病気がかりやすい。物乞いやくず拾いなどで生活を維持することが多い。